

鯨絵 俗信とリアリズム

姿が見えない敵ほど怖ろしいものはない。災害もまたしかり。姿が見えないゆえに、いつどこに現れるかわからない。古来、幾たびもの震災に見舞われてきたわが国では、地震にまつわるさまざまな伝承が語られてきた。地震という得体の知れない力に、なんとか目に見える姿をあたえ、腑に落ちる説明をつけようというわけである。

地震をめぐる民間伝承のなかで、今でもときおり耳にするのは地震の原因を鯨とする俗信だ。地下に大きな鯨が潜み、これが暴れると地震が起きる。鹿島大明神が要石（かなめいし）という巨石で地下の大鯨を押さえているのだが、要石がゆるむと大鯨が暴れ、地震が起きるのである。

この地震と鯨の俗信を、図像によって広く巷間に流布したのは、安政江戸地震（一八五五年）の際、江戸でブームになった鯨絵である。地震が起きた十月二日の直後から、無届けで出版（当時は時事に取材した出版が禁止されていた）され、十二月に入って取り締まりが強化されて版木が打ち壊しになるまでの二ヶ月余りの間に、二百種を超える鯨絵が出版された。その多くが色鮮やかな大判の錦絵（多色刷り木版画）である。

ここに採り上げた通称「江戸鯨と信州鯨」と呼ばれる鯨絵は、二枚続きの大判錦絵に、震災後の混乱をダイナミックに描いた大作である。中央下方では額に「江戸」と銘打たれた鯨が、また左上には「信州」の鯨が暴れ、それぞれに被災者が群がっている。江戸で起きた地震に信州の鯨が登場するのは、善光寺地震（一八四七年）の記憶による。八年前の善光寺地震は、ちょうど御開帳と重なったために、諸国から出かけて被災した人も多く、江戸での関心も高かった。この時に江戸で地震鯨を描いた錦絵が出版され、鯨絵のさきがけとなった。この大判二枚続きの鯨絵で、江戸に現れた信州の鯨は、そうした鯨絵の出自を暗示しているとも読み取れる。

市中で暴れる二匹の大鯨に、恨みを晴らさんとばかりに人々が群がっている。江戸鯨には歌舞伎「暫」の立役が、信州鯨には善光寺の坊主が、それぞれ先頭になって取り付いている。しかしよく見ると、鯨を懲らしめている者ばかりではない。地震後の復興景気で儲けた職人などは鯨に同情し「もうかんにんしておやんなせへ」と群がる人々を逆に制している。焼け出された被災者を相手にひと儲けしたおでん屋の女将や、焼け跡で金物を拾った古金屋（ふるがねや）も同様だ。多彩なリアリズムの視点から世相を捉え、決して被災者を一色には描いていない。

右上に小さく描かれた武者姿の男も面白い。出雲からあわてて駆けつけた鹿島大明神だ。「これはたいへん、はやくいっておさへてやらずばなるめへ」。神様のくせに江戸のべらんめえ言葉をしゃべるのが笑わせる。地震が起きた十月は神無月と呼ばれるように諸国の神々が出雲に集まる月であり、当時の人々のあいだでは、その隙について鯨が暴れたのだと噂された。

鯨絵は善光寺地震に始まり、安政江戸地震の際に大流行をした後、再び発行されることはなかった。もちろん今日では、大鯨が地震を起こすなどと信じる者はいないし、地震ネタで洒落た風刺画がブームになる兆しもない。現代の社会では、災害によって被った物的な、また人的な損害に対し、被害者側の立場から、よりシビアな対応が求められ、それがなかなかユーモアと結びつかない。

しかし災害に対する一面的で過剰な反応は、一方でまた別の負債を生みかねない。多様なユーモアを複合した鯨絵が現代に伝えるのは、頑なになりがちな災害に対する反応を笑いによって解きほぐし、災害が持つ負のイメージを緩和する微妙な心のケアであるのかもしれない。

気谷 誠（きたに まこと／埼玉大学図書情報課長）



かぶと
かぶと
かぶと

かぶと
かぶと
かぶと
かぶと

かぶと
かぶと
かぶと

かぶと
かぶと
かぶと